



THE ULiCS TIMES

う り く す ・ タ イ ム ズ V o l . 5

平成30年度館長懇談会

平成30年12月26日、自然科学系図書館大会議室にて、図書館長との懇談会を行った。ULiCSのメンバーは、萩原館長をはじめ、図書館の北村事務部長、

湖内管理課長と対面し、一年間の活動報告や館長への質問、図書館への要望などを話した。(文学部3年 畠田)



質疑応答

Q. 図書館長の仕事とは？

A. 週1回の館長会議で、図書館に関わる意見の承認や状況の確認を行っている。大変高額な電子ジャーナル契約の枠組みを職員の皆さんと一緒に考えたり、学内・学外で図書館を代表して発言したりしている。

Q. 災害時、図書資料の保存や管理はどのように行われているのか？

A. 今年(平成30年)は、台風が多かったので、カビや雨漏り対策として書庫の本を取り出し消毒を行った。地震に対しては、阪神淡路大震災の反省を生かし、本棚の固定を行っている。重い本を下段に置くなどの呼びかけは徹底して行っている。また、保存方法として、古書は殺虫効果もある冷凍庫に置いている。

Q. うりこグッズをもっと商品化したい！

A. 大学広報課とは違い、図書館にはグッズ用の予算が用意されておらず、在庫を抱えるのが難しい。しかしULiCSから企画書ももらっているので、在庫を抱えないものや低コストのものなど、無理のない範囲で進めていきたい。

要望など

・勉強机の消しカスなどのゴミが気になるので、対策してほしい！
→昔に比べると、綺麗に使ってくれるようにはなった。ごみ箱設置をしても良いが、各机などに設置すると収集の手間が増えるという問題もある。

- ・自動貸し出し機でソフトカバーの本が読み取れない。
→自動貸し出し機の老朽化が進んでいるが、安価なものではないので入れ替えまでもう少し時間がかかる。
- ・社会科学系図書館の入り口から開架室までが遠い。
→設計上難しいところがある。新しい館(フロンティア館)からも直接出入りできるようにしたいが、入館ゲートの設置やセキュリティの問題があり、難しい。

図書館からULiCSへの質問

Q. 現在、入館者数、貸出冊数が減少している対策として、貸出冊数の上限を6冊から10冊にすること、試験期間だけでも一部図書館で8時から開館することを検討しているが、有効だと思うか？

A. 1限の前に行けるのは有難く、特に学部1・2年生には有効だと思う。
A. 朝はあまり行かない。

Q. 入館者数と貸出冊数の減少の原因は何だと思うか。

A. スマホなどネット環境の普及により、本を借りる必要性が減っているのではないかと。
A. ラーニングコモンズや研究室で学習する人が多く、図書館には本を借りる目的でしか行かない人が多い。

最後に、ULiCSへの要望とメッセージを頂いた。
(萩原館長)「ULiCS内輪だけで完結させるのではなく、まごまご読書会を筆頭に大学を巻き込んでほしい。」

ウリコニ



※社系書庫マップに1コマ登場します
チェックしてみてください！

THE ULiCS TIMES Vol. 5

2019年4月1日(月)

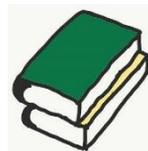
神戸大学附属図書館学生チームULiCS

<https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>

そのためにも知名度を上げてほしい。」

(北村部長)「“ULiCS TIMES”を毎号楽しみにしている。図書館側が気付かないような意見やアイデアをどんどん出して行ってほしい。」
図書館長との懇談会は、緊張に包まれながら始まったものの、お互いに質問や要望を出し、話し合うことであったという間に2時間が経ってしまっていた。ULiCSの正式名称は、“University Library Connects Students”。今回、実際に図書館運営をしている方々と話すことで、ULiCSは図書館と学生を繋ぎ、両者の要望を叶える存在であることを実感した。

ビブリオバトル観戦記



平成30年12月23日、2名のULiCSメンバーは立命館大学大阪いばらきキャンパスを訪れていた。「全国大学ビブリオバトル2018～大阪決戦～」の観戦をするためである。ビブリオバトルとは、発表者（バトラー）が制限時間内に本を紹介し、観客が読みたくなった「本」に投票するというものだ。

今回の大会は、全国の地区予選、地区決戦で選ばれた36名の発表者が集結しており、会場となるグランドホールではたくさんの観客が発表を待っていた。開会式が終わると6グループにわかれて準決勝がはじまる。バトラーたちが紹介する本のジャンルも5分間の発表で紹介する内容も様々。どの本をどのように紹介するかは事前に練習して準備をすることができるが、発表後の観客からの質問にはその場に応じて回答しなければならない。観客の投票方法は挙手、紙によるものなどがあるが、今回はうちわを利用しての投票。紅白歌合戦のように、前に立った運営の方々が挙げられたうちわを数えていた。

決勝戦では各準決勝を勝ち抜いた6名がもう一度同じ本について発表を行う。バトラーの発表が1回目と2回目で変化するところが、準決勝と決勝の両方を見ることによってわかるビブリオバトルの魅力だ。バトルごとに会場や観客の数が増えるため、発表するバトラーの緊張度や話し方も変わる。また準決勝よりわかりやすくなっていたり、紹介するエピソードや順序を変えていたり工夫がみられて面白い。うちわによる投票のため、どの本にどれぐらいの票が入ったか、大人の方々と学生たちの投票の傾向が違ふといったことも知ることができた。このようなビブリオバトルそのものの面白さに加え、イベントとしての楽しみもある。今回の会場ではバトラーが紹介した本を購入できたり、作家の石田衣良さんをはじめとするゲストによるトークセッションが行われたりしていた。関西では各地でビブリオバトルが開催されているので、興味を持った方にはぜひバトルの観戦やバトラーとしての出場をおすすめしたい。

(文学部2年)



「ビブリオ」は、「書物」を表すラテン語由来の言葉だよ！

この日観戦した2人目のメンバーである私は、ビブリオバトル初観戦だった。会場の広さや熱気はもとより、バトラーたちの練り上げられた発表に文字通り圧倒された。

バトルで最終的に決定されるのは最も観客が読みたくなった「チャンプ本」であって、発表者はバトルの主役ではない。けれども、本の魅力が伝わるかどうかは、やはりバトラー次第である。というのも、このバトルが観客を惹きつけるその理由は、本の魅力だけではなく、「読書体験の共有」であるからだ。キャッチーなストーリーの本を選んだとしたら、勝ち進みやすいかもしれない。だが、バトラーたちは、誰もが思わず注目してしまうような展開の本でなくても、自分の経験とセットでその本の魅力を伝える努力をしていた。例えば、決勝でそんな本を紹介したバトラーさんの一人は、「背中をぼんっと押ししてくれる本」とその本を表現し、その本が自分の人生に与えた影響を語ることで、見事にその本の魅力を引き出していた。

自分にとって大切な本や、自分の選んだ1冊を、魅力的に紹介できたら、それはまるでスポーツのように興奮し、感動する経験になるに違いない。生き生きと語るバトラーたちの表情からそう感じた。また、自分の好きな本の魅力を紹介できたら、それだけで嬉しいことではないだろうか。私には、全国大学ビブリオバトルはあまりにも大きな舞台に感じられたが、ULiCSのメンバーや文学部の友人たちと、まずは小さな舞台で始めてみたいと思った。実際にバトラーになれば、ビブリオバトル、その魅力をより実感できるだろう。

(文学部3年)



ULiCSでは、ビブリオバトル開催を企画中！
バトラー・観客のどちらでも、参加大歓迎！！ 詳細は近日公開予定です。

〈読書会イン・ライブラリー〉のススメ

読書会とはどのような営みをいうのであろうか。辞典によると、

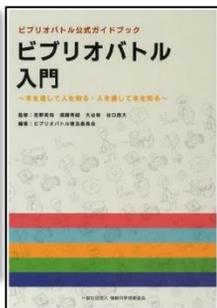
- ①「何人かで同じ書物を読んで、その感想などを発表し合う会合（精選版 日本国語大辞典）」
- ②「数人が定期的に集まって本などの感想を述べ合う会合（図書館情報学用語辞典）」

とある。つまり、本を読むという極めて個人的な営みを、複数の人間があつまり分かち合う行為だといってよい。

この読書会の形態が近年少しずつ変わりつつある。従来の主なやり方は、決められたテキストをメンバーが順番に一区切りずつ読む「輪読会方式」か、同じく決められたテキストについて指導者を中心にしてメンバーが報告する「研究会方式」の2つである。いずれも同一のテキストを用いることでは共通している。しかし近年「ビブリオバトル」という新しい読書会の形式が生まれた。従来の読書会との大きな違いは、**テキストを参加メンバーがそれぞれ選択する点**である。あらかじめ決められた本を読んでくれるのではなくみずから主体的にテキストを選ぶのである。この形式の発案者（谷口忠大）は、その効用を「**本を通して人を知る 人を通して本を知る**」ことができるというキャッチフレーズにして表現している。ビブリオバトルについて簡単に説明すると「発表者が面白いと思った本を持って集まり、順番に1人5分間で紹介し、その後参加者全員で短く討論したうえで、どの本が一番読みたくなかったか投票して〈チャンプ本〉を決める」というルールである。

ではこの新しい読書会の形式であるビブリオバトルをどこでやればいいのか。もちろん人が集まることができればどこでもいいのだが、図書館にはラーニングコモンズ（LC）という空間がある。LCは社会の情報化や大学改革の流れの中で生まれた大学図書館の新しい空間であり、だれでも自由に使うことができる。神戸大学の図書館でも2013年にビブリオバトルを3か所のLCで実施したことがある。

▼ラーニングコモンズの例



▲ビブリオバトル関連書籍

読書はいつも孤独な営みである。読書会あるいはビブリオバトルという共同の作業を通して「本を知り人を知る」ために図書館をおおいに利用してほしい。

(人文学研究科修士2年 紙谷寛)

(参考) 附属図書館ラーニングコモンズ一覧 <https://lib.kobe-u.ac.jp/lc/location/>

書評 BOOK REVIEWS



まずは「酒見版『三国志bot』」で検索！
酒見賢一著
『泣き虫弱虫諸葛孔明』
文藝春秋 2004

この『泣き虫弱虫諸葛孔明』シリーズは2004年から10年間文藝春秋で連載されており、自分としては珍しく単行本、文庫本、電子版をすべて買った。なぜかと言えば、寡作かつ連載休止が多い筆者の生活を支えたかったからだ（Googleの検索サジェスションで「酒見賢一 現在」が出るほど）。貢ぎたくなるほど無二の個性をもつ作家、それが酒見賢一氏なのである。

中身の説明に移ろう。とりあえず「サンゴクシヤン」「ぐんしーする（「軍師」を動詞化した表現）」「プラン・オブ・スリー・キングダムズ（天下三分の計）」といったパワーワードが乱舞する。そして、三国の争いをラーメン屋の争いに例えたり、「呉」違いで呉の陣営は広島弁を話したりと自由極まりない。このように色物三国志なので、基本的な三国志の知識があるとギャップで笑える。また、「エッセイでは??」と思うほど筆者の語りが多い。ノリとしてはサブカル臭を強くした宮沢章夫や清水義範と言えは伝わらるだろうか。まとめると、万人受けはしないが刺さる人にはとても刺さる（そして、私のように貢ぐ君になりうる）作品だ。

第一部から第四部までは国際文化学図書館に入っている。だが、最終巻である第五部は入っていないので、気に入った人は購入して一緒に貢ぎましょう。なお、最近では月刊スピリッツで漫画化もされている。が、酒見先生自身は2014年から新作を発表していないことを申し添えておく。

(職員 山本)

良き出会いのためのシナン



「恋人が欲しい」、「本が読みたい」という2つの欲求は、具体性がないという点についてはどちらも同じ性質のものである。こうした暗中模索状態から抜け出すためには、自身が求めるものを明確にするというターゲティングが必要になってくる。まあ恋愛の話はさておき*、良い本と出会う方法は実はそんなに難しくない。まずは自分の嗜好に合う批評家を見つけることから始めてみよう。彼らは先導者となって、私達に読むべき本を示してくれる。

では、そうした批評家はどこにいるのか？ 惜しいことに日本では草の根のように個人ブログで行われているものが主体だが、海外ではレビュー文化は主要メディア上でも非常に活発で、オスズメ本〇冊なるものがひっきりなしに発表されている。そうした有象無象の中にも、ひとたびリストを公表すると、NY Timesを始めとした大手メディアが一斉に報じるほどの大物読書家(?)もいる。前大統領のバラク・オバマだ。折角なので、そんな彼が昨年末に発表したリストを見てみよう(下表参照)。意外なことに、アディーチェの『アメリカーナ』やOndaatjeの最新作"Warlight"など、人文系の本が相当数入っている一方で、いわゆるビジネス書は一冊もない。また、オバマ氏の最近の関心はアフリカにあるらしく、それを反映してかアチェベ、ジオンゴ、マンデラ等のアフリカに由来した人物の名前も多い。

邦訳されている本が少ないのが残念だが、リストに載っている本はどれも一級品で、彼がエスタブリッシュメントと呼ばれるにふさわしい教養の持ち主であるということが伺える。ちなみに、Facebookに投稿されたリストには「(物が)読める大統領が恋しい」という皮肉なコメントがついていた。私達はきっと、自分の読書スタイルが2人のどちらに近いのか自問自答しなければならないのだろう。

*自分の世界観を豊かにしてくれる魅力的な本にどれだけ出会えるかというのも、人生における重要課題なのだ。学生よ、勉強しろ。

(国際協力研究科修士2年 小林
〔3月卒業〕)

1. "Becoming" by Michelle Obama
2. "An American Marriage" by Tayari Jones
3. 『アメリカーナ』 チママンダ・ンゴズイ・アディーチェ著
4. "The Broken Ladder" by Keith Payne
5. "Educated" by Tara Westover
6. 『FACTFULNESS』 ハンス・ロスリング他著
7. "Futureface" by Alex Wagner
8. 『一粒の麦』 グギ・ワ・ジオンゴ著
9. "A House for Mr Biswas" by V.S. Naipaul
10. 『民主主義の死に方』 スティーブズ・レビツキー他著
11. "In the Shadow of Statues" by Mitch Landrieu
12. 『自由への長い道』 ネルソン・マンデラ著
13. 『年収は「住むところ」で決まる』 エンリコ・モレッティ著
14. 『帰還』 ヒシャーム マタール著
15. 『崩れゆく絆』 チヌア・アチェベ著
16. "Warlight" by Michael Ondaatje
17. "Why Liberalism Failed" by Patrick Deneen
18. "The World As It Is" by Ben Rhodes
19. "American Prison" by Shane Bauer
20. "Arthur Ashe: A Life" by Raymond Arsenault
21. "Asymmetry" by Lisa Halliday
22. "Feel Free" by Zadie Smith
23. "Florida" by Lauren Groff
24. "Frederick Douglass" by David W. Blight
25. "Immigrant, Montana" by Amitava Kumar
26. "The Largesse of the Sea Maiden" by Denis Johnson
27. "Life 3.0" by Max Tegmark
28. "There There" by Tommy Orange
29. "Washington Black" by Esi Edugyan



Instagram @barackobamaの投稿 Favorite Books of 2018 より作成。
邦訳が存在するのは日本語表記(2019.2時点)、訳者・出版社・出版年・副題は略。